



[水田作部門]

[農業研究所ホームページへ](#)

3. 水稻「きぬむすめ」の食味を重視した栽培管理方法

[要約]

「きぬむすめ」において食味を重視した栽培を行う場合、基肥・中間追肥の窒素施用量を慣行の 5 ～ 8 割程度に控え、幼穂形成期の草丈と葉色の積が 2,300 未満では穂肥窒素施用量を 0 ～ 2 kg/10a とし、2,300 以上では無穂肥とする。

[担当] 岡山県農林水産総合センター農業研究所 作物・経営研究室

[連絡先] 電話086-955-0275

[分類] 技術

[背景・ねらい]

2014年に本県の奨励品種に採用された水稻品種「きぬむすめ」について、良食味を目標とした栽培方法を明らかにするため、施肥による生育制御が行いやすい分施体系において幼穂形成期の生育と食味の関係を明らかにし、施肥管理方法としてまとめる。

[成果の内容・特徴]

1. 「きぬむすめ」は幼穂形成期の草丈(cm)と葉色(SPAD値)の積と蛋白質含有率との関係が強く、積が2,300未満で良食味の目安とされる蛋白質含有率6.4%以下になりやすい。一方で、積が2,800以上で蛋白質含有率が6.4%を上回りやすい（図1）。
2. 基肥、中間追肥を窒素施用量で慣行（5～6 kg/10a程度）の5～8割程度施用すると、草丈と葉色の積が2,800未満となりやすく（図2）、収量の低下も少ない。
3. 幼穂形成期の草丈と葉色の積が2,300未満の場合、穂肥の窒素施用量が0～2 kg/10aであれば安定して蛋白質含有率6.4%以下となる（図3）。積が2,300～2,800の場合、穂肥無施用であっても蛋白質含有率6.4%を上回ることがあるため（図3）、穂肥は無施用を基本とする。

[成果の活用面・留意点]

1. 赤磐市において6月中旬に移植栽培した結果であり、移植時期が大きく異なる場合には生育が異なるため適用できない。
2. 試験圃場の土壌可給態窒素は改良目標範囲内（8～20mg/100g）であり、現地での土壌可給態窒素量が大きく異なる場合には穂肥窒素施用量を増減する。
3. 速効性化成肥料を分施した結果であり、緩効性肥料を用いた場合は生育相が異なるため溶出予測に基づく肥培管理を行う。
4. 葉色はSPAD値28でカラスケール値3程度、32で4程度である。



[具体的データ]

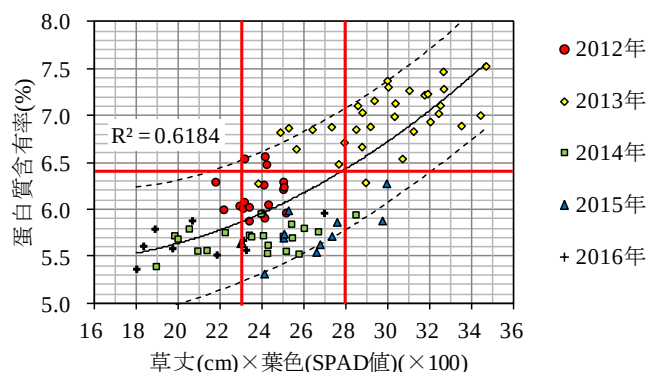


図 1 「きぬむすめ」の幼穂形成期の草丈と葉色の積と蛋白質含有率の関係

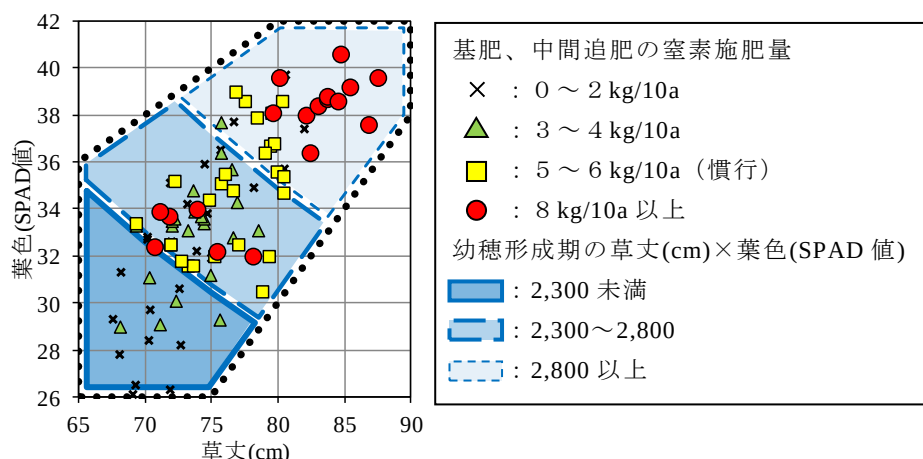


図 2 「きぬむすめ」の基肥、中間追肥の窒素施肥量と幼穂形成期の生育との関係

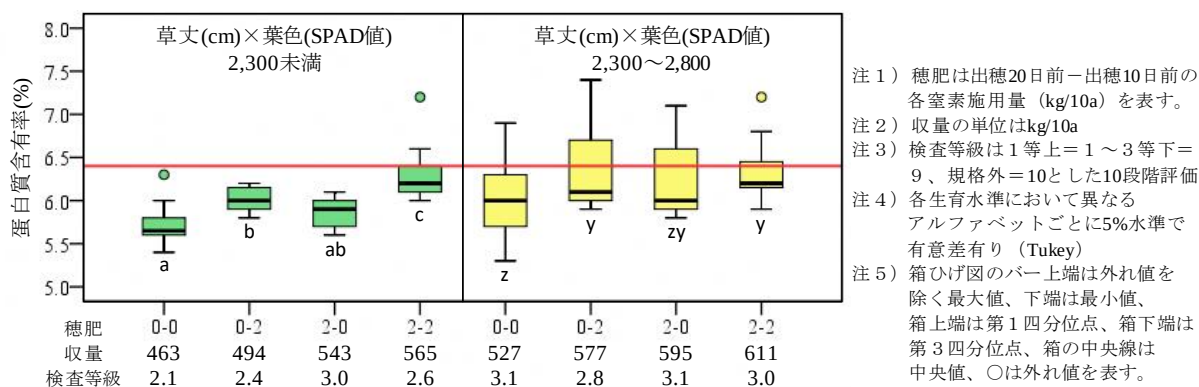


図 3 「きぬむすめ」の幼穂形成期の生育別の穂肥が蛋白質含有率に及ぼす影響

[その他]

研究課題名：きぬむすめ、にこまるの高品質生産技術の確立と温暖化対応品種の選定
 予算区分：県単

研究期間：2012～2016年度

研究担当者：井上智博、水田有亮、前田周平、妹尾知憲

関連情報等：1) [平成23年度試験研究主要成果、1-2](#)

2) [平成24年度試験研究主要成果、1-2](#)

3) [平成24年度試験研究主要成果、3-4](#)

4) [平成24年度試験研究主要成果、5-6](#)

5) [平成26年度試験研究主要成果、3-4](#)

6) [平成26年度試験研究主要成果、5-6](#)

7) [平成28年度試験研究主要成果、3-4](#)